

県民による博物館シンポジウム記録



平成14年7月

特定非営利活動法人地域資料デジタル化研究会
特定非営利活動法人文化資源活用協会

山梨県立博物館の建設促進を求める県民シンポジウム 「デジタルで変わる 21世紀の博物館」

【開催趣旨】

特定非営利活動法人 地域資料デジタル化研究会（代表 小林是綱）ならびに特定非営利活動法人 文化資源活用協会（代表 深沢裕三）の2つのNPO法人の共催による、公開シンポジウム『県民による博物館シンポジウム「デジタルで変わる21世紀の博物館」』の開催を企画しました。

地域の歴史や文化を、最新のIT技術等を用いてデジタルアーカイブを構築しようという活動は、公的機関や教育機関だけでなく、個人やグループによる生涯学習、市民活動としていまやひとつの全国運動となってきました。このような中、私たちはデジタル技術を使い、県民参加で創る博物館＝デジタルミュージアムを提案していきたいと考えています。このため、昨年11月甲府市で開催された全国マルチメディア祭inやまなしの会場で、東京大学の坂村健教授を迎え、「デジタル博物館」をテーマとする公開フォーラムを開催しました。

この視点から、私たちは、山梨県の21世紀の文化創造拠点の一つとして、私たちは、博物館の存在が重要だと考えます。このため、現在計画中の山梨県における県立博物館（仮称）を建設推進を切実に要望いたします。

しかしながら、公開されている建設基本計画では、デジタル・ネットワーク技術への対応が不十分であり、「21世紀の地域文化情報拠点」としての博物館のあり方に課題を残しております。

私たちは、山梨県民から博物館建設促進のエールとして、公開シンポジウムを開催し、「デジタルで何が変わるのか」「県民参加によるデジタルミュージアムって、どういうこと」を県民とともに問いかけていきます。

【開催概要】

主 催： 「デジタルで変わる21世紀の博物館」シンポジウム実行委員会
共 催： 特定非営利活動法人 地域資料デジタル化研究会（代表 小林是綱）
特定非営利活動法人 文化資源活用協会（代表 深沢裕三）
日 時： 平成14年7月20日（土）
13:00開場 / 13:30開演 / 17:00終了
場 所： 山梨県立総合女性センター 2F 中研修室
参加費： 無料
内 容： ●基調講演「21世紀：ミュージアムのカタチ」
山本育夫（ミュージアムマガジンDOMÉ編集長）
●シンポジウム「デジタルで変わる21世紀の博物館」
たか ひでこ（コーディネータ/フリーアナウンサー）
山本育夫（ミュージアムマガジンDOMÉ編集長）
河澄修（山梨県情報サービス産業協会常務理事）
澤谷滋子（長坂町郷土資料館学芸員）
濱崎好治（川崎市民ミュージアム学芸員）

会場参加者数： 76人

< 基調講演 山本育夫 >

「21世紀：ミュージアムのカタチ」

21世紀の博物館のスタイル、形が急激に変わり始めている。

美術館、博物館が独立採算を求められ、独立行政法人に変わっている。東京国立博物館が独立行政法人となり、名前は変わらないが、中身は本来の国立博物館ではなくなっている。

国立大学も同様に国立ではなくなる。表向きには変わらないが、中身、システムが変わってしまった。

しかし、独立行政法人として人事権を持てるようになり、収益も法人内部に留保できる



ことになった。

東京都博物館では、企画展を開催するには、まずスポンサーを探すことから始めることになってしまった。また評価制度が取り入れられ、A B C Dのランク付けがされ、最低ランクは廃止されることとなった。

一方、学校も教科を横断して学ぶ方向に変わりつつある。学ぶために教科がある方向に変わった。

こうした変革の時期にあって、博物館のあり方は、

1．市民参加 2．情報公開 3．センター機能 4．エンターテインメント 5．評価
が重要なキーワードとして上げられる。

まず県民市民参加、情報公開が重要なキーワードである。

市民参加のスタイルは以下の4つがあげられる。

- 1．ボランティア
- 2．ワークショップ（実技講座ではない）
- 3．ギャラリートーク（講演会ではない）
- 4．セルフガイド（会場に無料で置く図録でない）

博物館のあり方が従来の縦型社会、権威社会から利用者である市民と同じ目線に立ったスタイルにかわった。

情報公開では以下のようなさまざまなものが求められる。

- 1．ミュージアムの情報公開（現実：ミュージアムがなぜ必要なのかのメッセージがない）
- 2．コレクションの情報公開（これも十分な説明がなかった）
- 3．展覧会の情報公開（あるにはあったが、イベントとしての評価は、入場数だけだった）

・センター機能

ミュージアムに人が集まる機能が要求されている。

博物館学芸員の役割が変化してきた。博物館の権威主義がくずれ、価値の多様化のなかで学芸員がカバーできなくなってきた。予算も削られてきた。それで市民の協力が必要になった。学芸員が研究プランナー、コーディネータとなって、人材を育成する場ともなる。

・エンターテインメント

ミュージアムに学ぶ楽しみが求められる。ハンズオン、バリアフリー、保育所、ミュージアムショップ、レストランカフェも必要。

・評価

行政評価（東京都の例では）、第3者評価、市民評価。

ミュージアムも地域社会の中の一つの行政施設で、病院もある、消防署もあるという理解

がない。学芸員も県外出身者が多く、いずれどこかへ行ってしまう。ミュージアムをだれが、本当に守るのか。

・ミュージアムのメディア

- 1．ポスター、チラシ、公報
- 2．メールマガジン、メーリングリスト、ホームページ
- 3．ツアー つなぐためのアクセス

山梨県立博物館の基本計画では、上記のようなかたちは網羅しているように見える。しかし、実態は展示業者が矢面に立たされて、青ざめている。

これまでの経緯では、市民が自分たちで学んで入っていこうとする気持ちがなく、行政にまかせていた。僕らも心を入れ替えて、どんどん参加していく。また参加しなければいけない。

・その参加の方法

公共機関（だけでない）、企業（だけでない）+ NPO

私は評価の部分で「つなぐNPOアクセス、観客の学校」を進めている。現在世界中のミュージアムウォッチングのネットができて、最近もMOMAや大英博物館で現地取材がしてもらった。

学ぶために、縦型社会を変えていく。

ランデブーという雑誌は、企業貢献だが、そのデータは、制作のとき、すべてデジタル化されていて、気がついたら、全部ネットで公開することができる。



< パネル討論 「デジタルで変わる21世紀の博物館」 >

●山本

国立民族学博物館は、デジタル展示のスタイルを反省している。最新のデジタル機器が実験のため入っているが、モニターが重い、データの表示が遅い、観客は物語が欲しいのにデータばかり、つまらないと、利用されてなくなっている。子供たちは機械にタッチして反応をみるだけで、中のコンテンツを見ようとはしない。ただのデータは館内では読まれないと知るべき。そうしたデジタル機器は組み込まないほうがよい。

これまでのミュージアムは何かしているフリをしていた。ことばで市民参加、開かれた美術館とは昔から言っているが、実際はそうではない。

21世紀の理想の博物館は、フリではなく、その町が博物館は人間の人生をみせてくれるもの。それが業者任せであったり、血の通ったものが少ないというのは、県立くらすの大きいものになると、どうしても薄くなる。

博物館は山梨県の人生をみせてくれるもの。どこかで対話できる要素を入れてあるべき。県民が作ろうという気持ちがあれば、大きくても可能だ。滋賀県立琵琶湖博物館では、こういうものが欲しいと言う機能の議論から始まり、博物館が実現した。館長以下、権威的でなく、県民目線で動いている。

●河澄

最低限のデジタル機器が必要である。しかし、その中身が大事である。ハズオンは参加体験型と訳すが 実際にはずれるので、いかに双方向に情報を交換するかにある。

デジタル化にはマンパワーが必要であり、そこでNPOの出番が必要になっている。

娘が英国に留学して、現地で、自分の郷土の歴史を知らなくて、恥ずかしい思いをして帰ってきた。英国では自分の家や郷土の歴史を大事にしている、よく知っている。日本ではだれが教えるのか、地域が子供たちに伝えられるのか。家庭でも伝えられない。自分の土地の歴史文化を教えられないことの問題点。地域に誇りをもって国際化に飛び出そうというとき、博物館はそのよりどころとなるべき。そのとき、学芸員がアイデンティティを教え、そのところの上に国際化が初めて対応できる。育てる場であってほしい。

●沢谷

デジタルでものをのこすことができる。長坂ではものは少ないが、古い記録が集まっている。読み込むことでいろんなことが見えてくる資料。デジタルで保存すればみんなに見てもらえる。しかし、データ保存が特殊なデジタル機器、ハードに依存するのでなく、とりはずして別の機械に入れられるようにしておくべき。

長坂にはものはないと言ったが、視点を変えればものは集まってくる。ある家のお蔵にいったら、70代のおじいちゃんからぼろぼろの日章旗をあげると言われた。見たら、南京入城記念とあった。これを子供にみせなきゃと思った。あの歴史上の南京事件はとなりのおじいちゃんの物語だった。

町が衰退しているといわれるが、町の歴史教育に問題があるではないか。何で商店街が衰退したか、鉄道の問題をあるだろうし、町がどうバックアップするか、近現代史に入っていく。町づくりに入っていく。博物館で市民参加で町の人たちと話ができる。市民参加でつくっていくあり方。

先ほどの博物館を子供のためにという言葉、1回ひっこめてみないか。大人のために大人が楽しめるようにしよう。

県はハブ博物館といっているが、どうも県立博物館中心の考え方で、気にかかる。

●浜崎

ものの保存でデジタルは道具である。昔はその道具がペンであった。倉庫に眠っているものに、光を当てると劣化する。風を当てれば風化する。これを高品位テレビ、ハイビジョンができたとき、全部これに置き換えればいいといわれた。これが今は小さなパソコンで視聴できるようになり、選択できるようにもなった。

私の先祖がどういう人か、ヨーロッパでは歴史を大切にしているからそれが分かる。現代の博物館では例えば戦争の記憶をどう伝えるかが課題になっている。

私は戦争をテーマに映像を残す作業をしている。自分のテーマでやっているの、館の

金はかけていない。しかし、館には残すが。

私は博物館のプロデューサーなので、市民がどうやったら研究ができるか、ワークショップをしている。

- 会場からの意見

- ・ シンポジウムの主催者は、県の財政難を正確に把握して博物館の議論をするのが筋である。既存の施設を利用して、デジタル化をすれば120億円の巨額の投資をしなくても実現することも議論すべきである。

- ・ 博物館に箱は必要でなく、全県フィールドミュージアムにすればよい。

- ・ 本物の収集、展示、保存のための施設は必要である。

- ・ 県の博物館論議は、出来レースで県によいしょの人ばかり集めて、県民の声をきいたとしてきた。県議会では箱の話ばかりで中身の話をしてこなかった。そんなことで強引に進めてよいのか。県民の声を聞こう、アンケートをしようと言っても県は聞かない。しかし、本日のシンポジウムでまだまだ真剣に考えている県民がいることを知り、安心した。

(以上)

県民による博物館シンポジウムアンケート結果

■ 性別	男性	女性	15 人	5 人	計 20 人	
■ 年齢	20 代	30 代	40 代	50 代	60 代	
	4(2)人	4 人	2 人	8(2)人	2(1)人	()は女性
■ 職業	公務員	会社員	自営業	その他		
	7(2)人	2 人	2(1)人	9(2)人	()は女性	
■ 住所	甲府市	韮崎市	高根町	春日居町	石和町	
	11(3)人	1(1)人	1 人	1 人	1 人	
	田富町	櫛形町	白根町	東京都	未記入	
	1 人	1 人	1(1)人	1 人	1 人	()は女性

1. 本日のシンポジウムで興味を持たれた話題はありましたか。

a. はい	b. いいえ	c. よく分からなかった	未回答
18	0	0	2

2. 上記の問いで（a. はい）を選択された方にお聞きします。どのような話題に興味を持たれましたか。自由にご記入ください。

- ・ 博物館，デジタル化にしても目的意識が重要であることを再認識しました。
- ・ フィールドミュージアムの問題性についてもっと聞きたいと思った。
- ・ NPO という第 3 勢力によって，「たよる」のではなく，独立独歩で，意思を実現させようとする姿にとても共感しました。
- ・ 県民（住民）参加の（博物館）づくり
- ・ ストーリーがないと読まない，面白くないという山本さんのお話
- ・ 博物館の必要性，精神的なものの重要性，デジタルの有効な活用
- ・ 血の通った博物館
- ・ もっと生まれた土地，地域の歴史，文化を知ろう。
- ・ デジタルをどのように活用すべきか，大きな課題提起があった。他の資料館との連携，学校への発信などに有効に機能すると思う。さらに活用方法を考え，日本国内にほこれる博物館を作っていく必要がある。自分自身も楽しみながら，この課題を考えていきたいと思いました。
- ・ 結局，大事なのは技術ではなく人です。「デジタルで変わる博物館」というのはウソですね。「英語が出来れば変わる人生」というのと同じマヤカシです。
- ・ デジタル化のもつ意味，もたらす発想の変化について，学べるすばらしいチャンスであったと思います。
- ・ デジタル化
- ・ 市民参加
- ・ NPO
- ・ デジタル手法
- ・ 展示のディジタル化
- ・ 浜崎さんの話のなかで，「劣化する資料を半永久的に保存するためにデジタル化が必要」とありました。展示＝劣化のジレンマにつき合っていくのは，博物館側の終わりのない課題だと思います。デジタル化は，その解決策を与えてくれる手段ですが，デジタル情

報を表に出して、宝物を隠してしまうのでは、モノを媒介として情報を伝える博物館の方法論や役割を否定することになるのだと思います。むしろ、実物を出して、デジタルの情報は裏方の基礎データとして保管すべきです。そういった意味においては、学芸員たちのこれまでのジレンマがある程度解消され、21世紀の博物館像として有効になるのではと考えます。

- ・ 浜崎さんと澤谷さんのお話は興味深い。しかしデジタルについての議論は、各発表者のデジタルの認識が違い、かつ、聴衆とパネラー側との共通認識もなかったため、ほとんどわかりにくかった。

- ・ パネリストすべて

- ・ 「デジタルだけが変わる手段ではない」という意見、もっとアナログ的なしかけが面白いと思う。どういう形で語り残すかを今一度考えてみる。

- ・ インタラクティブ（双方向性）

3 県立博物館（仮称）建設では、歴史・文化遺産を保存、継承、学習資源とすることが計画されていますが、県民の間では財政難を理由に反対する意見もあります。あなたのご意見はどちらですか。

a. 反対意見の通り	b. 財政難でも工夫して推進	c. 分からない	その他	未回答
3	14	0	1	2

4. 今回のシンポジウムで討議された意見もふまえ、県当局に県立博物館（仮称）の建設に関する提言書を提出いたします。あなたのご意見もお聞かせください。（自由記入）

- ・ カタチとしてはいろいろなものがあるかと思いますが、「博物館」として他に譲れない目的、機能は何かを十分に検討して必要なものを提示していく必要があると思います。財政難という理由で何もかも水泡に帰してしまったり、代替的な（にもならない）単なるデジタルアーカイブに収まってしまうことのないよう期待しています。

- ・ 財政問題と博物館の中身は別に考えるべきである。

- ・ デジタルは道具という言葉は必要

- ・ やはりその前に、物も重要であることが前提であると思う。

- ・ 高齢化社会に向けた老人にとっての博物館のあり方、利用方法、あらゆる文化施設等（個人美術館など含む）とのネットづくり、どう利用者を増やせるかなど市民が考え建設できるものを望む。

- ・ 大賛成です。活躍を期待しています。

- ・ ニワトリと卵の話があります。博物館を造る前に行うべきことと、造ってから、進めるべきことがあると思います。

- ・ まず山梨になかった博物館を造り、そこで、県民が参加する場をつくることが必要。箱は必要、デジタルは一部でしかない。

- ・ 県民参加のできる博物館

- ・ 本物を見て創造性を高めるための博物館を、ごく早期に造ってほしい。

- ・ 沢谷さんが言っていたように、「小さな博物館でしか出来ないようなもの」を出来るような「大きな博物館」であってほしい。

- ・ 実物展示も必要、その説明をする学芸員も必要。又デジタル化も必要だと思う。保管又映像での説明も必要だと思う。

- ・ 県立博物館と地域博物館とのネットワークの構築（特に地域に有る博物館の存続を考えてほしい）。

- ・ 博物館は必要だと思います。

- ・ 今でないと保存出来ないものもあるので。

- ・ 建設反対。すでにある施設、文化財建造物の有効利用。

- ・ 金がかかるのはこれほどすばらしい内容だからだ、ということを示す等、県は展示内容、その周知、普及について努力をすべきだと思う。ところで、デジタルで 21 世紀の博

博物館は変わると思いますか。主催者側が看板に挙げた言葉の意味が結局よくわかりませんでした。議員の話は聞きたくないです。今回は誰のためのシンポでしょうか。意見を言わない人は言わなくていいし、言いたい人が言えればいいと思います。

- ・ 人間の知性が反映できるよう良いものが出来ますように。
- ・ 博物館建設予定地の長坂（ママ）の場所が悪いと思う。もっと場所を研究すべきではないか。
- ・ デジタル化時代、グローバルに見た日本の GDP 経済成長 7 % 気分の時に早くけじめをつけたひきしめをしていかなくては。環境!!これが一番のもとをなす。今ある交通機関をつかってマイカーはなくすということから考えても御坂につくることは絶対反対です。道州を目指すという合併。文学考古館、ボランティアにたより閑散としている。テレビを見ていた方が自由に学べる時代、赤字にまとわれた箱物はいらない。デジタル化でチャンネルが増えればチャンネルの中にいれこめる。

・ 山本さんが説明された「博物館の目的」が大事だと思います。箱物は県や市町村にも多々あるのでその違いが明確に区分けされ、どちらも共存、発展するような可能性があるかどうかだと思います。

・ 住民参加というでは個人的には市町村にある箱物の方に関心があります。私は春日居町に住んでいて町には郷土資料館があります。金井町長、末館長など優秀な方が多数いますので他にはないよい企画が行われていると思います。ただもっと住民参加をすすめて、新設のアグリステーションも含めて、せっかく作った箱物をいろんな人が関わり面白いソフトを寄せあえば、住んでいて楽しい町ができるような気もしています。県立博物館が目的やどれくら住民参加のキャパシティを広げられるかがカギのような気がします。38 年間県民ですが県立美術館には、3, 4 回くらいしか行ったことがありません。それも積極的に行ったのではなく学生時代にデート場所だったり、たまには絵画など芸術にふれないと心が貧しくなるかなと思ってのことくらいです。思えば県立美術館建設前後ミレーなどの宣伝はよく聞きましたが「なぜつくるのか」「どのような公共施設をめざすのか」ということは記憶に残るようなものはなかったような気がします。昨年家族で長野県にある戦没画学生の記録を残した無言館という美術館に行きました。画学生やご両親の無念さに心を痛めたり、あの美術館をつくったかたがたの情熱に共感する一方で、たまたま市民生協やまなしを通して無言館の存在を知ったのですが、もしかしたら一生知らないまま、訪れることもなく過ごす可能性もあったのではと思うと情報が氾濫する時代に大切な情報を入手するむずかしさを感じました。

・ 山本さんのお話で「物語のない話は、おもしろくない」ということに共感しました。専門家の話は、勉強にはなっても長時間きくには耐え難い経験もあり、誰から何を学ぶかということとはとても大事だと思います。先日、私の家に掃除機の修理で町のなじみの電気屋さんが来てくれたのですが、電子レンジの構造とか最先端機の特長などそれは興味深い話でした。こういった普通に働いている一般の人の話の方がライブ感があっていいなと感じたときと同じようなことかと思いました。

・ 今回の主旨で住民参加の。。づくりという方面がすすむとよいなと思いました。河澄さんが科学館の説明をされていたので 3 人の子どもを連れて年に数回は訪れる利用者として以下のようなことをご検討いただけると幸いです。なぜ冷蔵（冷凍）庫で氷がつかれるのか？ということが子どもに分かるコーナー、同様にテレビ映像や電話で声質まで伝えられるしくみなど...

以 上